

老年看護学の高齢者疑似体験に スチューデントアシスタントを活用した学生の学び

吉川 美保 (岐阜協立大学看護学部)
水上 和典 (岐阜協立大学看護学部)
松原 薫 (岐阜協立大学看護学部)

キーワード：高齢者疑似体験，高齢者理解，老年看護学，SA，教育方法

1. はじめに

近年の学士課程教育において、上級生が授業支援に携わるスチューデント・アシスト (Student Assistant、以下「SA」と記す) 制度が普及してきている¹⁾。日本学生支援機構調査²⁾によると、大学全体の約5割がSA制度を実施し、様々な活用事例が報告されている³⁾⁴⁾。SA制度の効果については、授業の効率化や質の向上に寄与していること⁵⁾だけでなく、SA業務がSA自身の学びにつながっていること⁶⁾が報告されている。看護系授業においてもSAとして上級生が参加することにより、受講生の高い達成度が示され学修意欲の向上につながった⁷⁾とされている。

こうした現状の中、本学看護学部では、2年次開講の『老年看護学演習』初回講義の高齢者疑似体験において令和5年度より4年次生によるSA制度を導入した。高齢者疑似体験とは高齢者の身体機能低下の理解を深めるために、シミュレーターを用いて、円背や下肢の関節可動域の制限、視覚や聴覚の特徴等を体験するものである。これらを体験することで、高齢者の身体的特徴に関連した動きの不自由さや危険性の高さを実感し、漠然としていた高齢者像がイメージ化できるようになった⁸⁾り、高齢者の心理への理解にもつながる⁹⁾とされている。また、体験学習を強化するためには体験学習後の討論時間が必要と報告されている¹⁰⁾。高齢者疑似体験の学びの質を向上させるためには、複数の生活体験の実施とその後のグループワークが必要と考え、SAを教育補助要員として導入した。

本研究では、老年看護学における高齢者理解にむけた高齢者疑似体験のSA導入事例を通じ、受講生である2年次生視点でSAによる学習効果をどのように実感しているか、また4年次生SA視点でどのような学びの場となっているのかを明らかにすることを目的とする。得られた知見をもとに、高齢者疑似体験におけるSA導入による効果および課題を考察し、よりよい講義展開へ活用していきたいと考える。

2. SAを活用した高齢者疑似体験の概要

1) 目的

2年次生に対する高齢者疑似体験の学修目的は、「高齢者の視覚、聴覚、運動機能などの低下を疑似的に体験することで、加齢による身体的な変化(筋力、視力、聴力などの低下)による運動機能が心身に及ぼす影響を考えることができ、自立と自律の視点を踏まえた看護援助の思考につながる」である。また、SAを活

用する目的は、上級生のサポートがあることで体験内容の深みが増し、上級生のかかわりが学習意欲の向上につながることである。

4年次生SAに対する高齢者疑似体験の目的は、演習サポートを通して教育的なかかわり方（自己の知識の伝達、安全への配慮などの方法）を経験することである。また、各自がもつ高齢者の理解と援助に対する考えを振り返る機会となり、卒業研究における考察への反映が期待できる。

2) 高齢者疑似体験装具

高齢者疑似体験において使用する装具は、株式会社京都科学“おいたろう”を使用した（写真1）。装具と高齢者の身体機能の再現内容は以下のとおりである。①ヘッドホン（耳栓）：高音域の聞こにくさを再現。②特殊眼鏡：高齢者の老眼（調節機能の低下）、白内障による色覚変化とぼやけて見える状態、視野の薄暗さを再現。③チョッキ：前屈姿勢の保持。④関節固定用具一式（手首用重り、足首用重り）：動作を緩慢にする。（肘サポーター、膝サポーター）：関節可動域の抑制。（靴サポーター）：つま先が上がりにくい状況をつくる。⑤手袋一式（布手袋）：手指の触覚、圧覚、温覚などの感覚の低下をもたらす。（手のひらサポーター）：巧緻性などの運動制限。⑥杖：片手で持ち、不安定さを支えるために使用する。

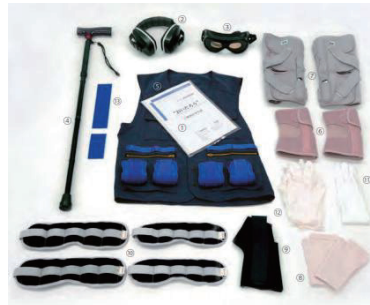


写真1 高齢者疑似体験装具“おいたろう”

3) 体験項目

体験する学習項目は次の①～⑦場面を設定した。①マットへの寝ころび・起き上がり、②椅子への腰掛け・立ち上がり、③浴室の出入り、シャワーチェアへの腰かけ・立ち上がり、④タオルケット・布団を畳んで押し入れに片付ける、⑤トイレ疑似動作（トイレトペーパーの使用・便座への腰かけ・立ち上がり）、⑥ほうき/掃除機の使用、⑦自動販売機の使用（財布からお金の出し入れ・商品の取り出し）

体験配置図を図1、実施状況の一部を写真2・3・4に示す。

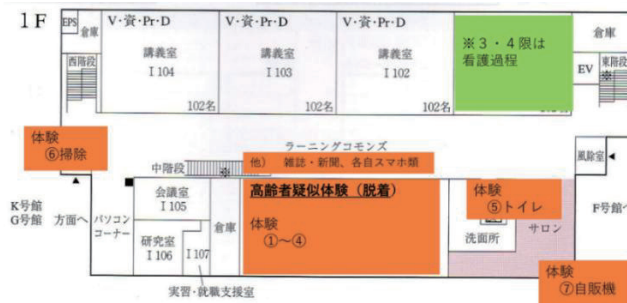


図1 体験配置図



写真2 体験④布団の片づけ



写真3 体験⑤トイレ

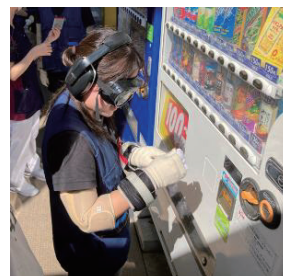


写真4 体験⑦体験自動販売機

表1 高齢者疑似体験演習の授業案

回	日時	内容	SA・教員の動き
	9/26 (木) 10:30	SA 集合・実施方法確認 おいたろう装着方法の確認 物品配置・準備	SA 集合 準備・確認
1	2 限	高齢者の身体的特徴、心理的特徴の講義 高齢者疑似体験のオリエンテーション ・学生はペアで 15 組（体験役と観察役） ・体験者…高齢者の視点、気持ちになって動くこと ・観察者…安全サポート、客観的にみた印象を記録 ※出席確認とペアの確認。1 人の場合は SA と組んで体験をおこなう	SA は 2 年生の体験が円滑・安全にすすむよう、装着補助や分担する体験時の声掛けを行う。
2	3 限 A グループ 導入 (5 分)	演習説明と装着の注意点	12:45 打ち合せ 装着に関する留意点 ・フィットさせる ・交代時は物品の清拭
	体験者 1 (35 分)	装具脱着 5 分 体験①～⑦を 7 ペアが順次演習（前半） 補助・観察者は実施の様子を客観的に記す	声かけや意図的な働きかけの具体例 ・「自然な楽な動きを意識してみよう」 ・体験者の目の前を横切る ・体験を急がす
	13:40 交代 (5 分)	アナウンス 「13:45 に交代できるように在宅演習室に戻ってください」	
	体験者 2 (35 分)	装具脱着 5 分 体験①～⑦を 7 ペアが順次演習（後半） 補助・観察者は実施の様子を客観的に記す	
	記録整理 (10 分)	【ワークシート 2】記入→提出 10/3 課題説明	
	4 限 B グループ	3 限のグループと交代し、同じ演習を行う。	
	16:30	片付け・原状復帰	
4	10/3(木) 2 限 導入 (5 分)	グループワークオリエンテーション 8 名 6G	SA は各グループにファシリテーターとして入る
	GW 資料作成 (45 分)	①疑似体験から感じたこと（高齢者の身心の特徴）の共有 ②看護者として援助で配慮すべきこと その理由や目的、また具体的にどうするとよいのかを示す	
	発表 質疑 (25 分) (5 分)	4 分×6G ①と②を体験内容を踏まえて発表・質疑	
	講評 まとめ (10 分)	SA から高齢者との関わりにむけた助言	【ワークシート 1】提出

4) 実施方法

高齢者疑似体験の授業案を表1に示す。なお、第3回は別の演習内容を行った。

高齢者疑似体験の事前準備として、SAは講義前に集合し、高齢者疑似体験の目的および流れ、SAの動きと高齢者疑似体験装具の装着方法の確認を行い、使用物品の配置準備を行った。

老年看護学演習第1回：身体に加齢変化（高齢者の身体的特徴・心理的特徴）についての講義と高齢者疑似体験オリエンテーション（装具の説明・体験方法等）を行った。

老年看護学演習第2回：2年次生47名を2グループ（A・B）に分け、24名・23名ずつ高齢者疑似体験を実施した。各グループ2人1組となり、体験者と援助者を交代し、全員が高齢者役・援助者を行った。体験は装着後35分とした。高齢者疑似体験中、SAは装具の装着補助・物品管理と各体験項目場所で体験サポートを行った。SAは装着時には教員とともに必要に応じて、装具が疑似的にどのような加齢変化をもたらすかを説明した。また、各体験項目場所では、2年次生がスムーズに体験が実施できるよう体験項目の確認や誘導を行った。体験後、SAは【ワークシート1】、2年次生は【ワークシート2】を記入した。

老年看護学演習第4回：高齢者疑似体験時に記入したワークシートをもとに＜高齢者の心身の特徴＞と＜配慮や工夫の仕方＞についてグループワークで意見交換と発表を行った。グループは体験時のペアで4組、8名になるよう6グループに編成した。SAはグループワークのファシリテートをした。

3. 研究方法

1) 研究デザイン

本研究は、高齢者疑似体験に関するSA活用の学びを記述し要約する質的記述的研究である。

2) 対象者

2024年度2年次生47名（2年次後期開講必須科目『老年看護学演習』履修対象）と、SA（4年次老年看護学卒業研究ゼミ生）のなかで同意を得られた者7名を対象とした。

3) 調査方法

2024年9月26日2・3限老年看護学演習第1・2回と、2024年10月3日2限老年看護学演習第4回の講義内で行った。

老年看護学演習第2回講義の高齢者疑似体験オリエンテーション後に、研究担当者が研究の趣旨、方法、プライバシーの保護、匿名性の保証、研究参加に対する拒否や途中撤回の自由、研究参加と評価とは無関係であることについて文書と口頭で説明し、研究に参加同意が得られた者には、同意書を提出してもらった。調査項目内容が含まれたワークシート（SAは【ワークシート1】、2年次生は【ワークシート2】）を老年看護学演習第2回・第4回講義内で記入し、老年看護学演習第4回終了時に収集した。

なお、本研究において申告すべき利益相反はない。

4) 調査項目

2年次生【ワークシート2】：高齢者疑似体験時における「SA介入による影響」

SA【ワークシート1】：SA活動を通して「SA体験による学び」

5) 分析方法

それぞれのワークシートの記述内容を意味を損なわないよう抜粋し、コード化した。共通した意味のあるコードをまとめ、意味内容の類似性と相違性を比較しながら類型化しカテゴリーを生成した。2 年次生のデータについては SA のかわわりと学びとの関連性について分析し、SA のデータについては SA 経験を通じての学びの傾向を分析した。分析の過程では研究者相互での妥当性を確保しながらすすめた。

6) 倫理的配慮

研究対象者に対して調査項目となるワークシートの研究利用について、研究の意義、目的、方法、予測される結果や危険について、文書と口頭により十分な説明を行った。対象者は、この内容を理解したうえで同意書に署名した。同意が得られた学生のワークシートは、調査項目毎にデータ化し、個人が特定できないよう学生番号や氏名を除いたものを統計的に使用した。本研究は研究者の所属機関でデータ収集を行うため、研究協力を拒否することで、学習上何らかの不利益をこうむるのではないかと懸念することが予測される。そのため、この研究への参加を拒否しても成績評価とは一切関係ないことを丁寧に説明した。なお、本研究は本学看護学部研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 EA-2024-001）。

4. 結果

1) 対象者

2 年次生：受講生 47 名のうち有効回答が得られた 40 名の回答を分析対象とした。

SA：4 年次生 SA 参加 7 名の回答を分析対象とした。

2) 2 年次生の「SA 介入による影響」が及ぼす学習効果

表 2 は高齢者疑似体験を受講した 2 年次生の【ワークシート 2】「SA 介入における影響」の結果である。71 のコードから 5 カテゴリーに分類された。カテゴリーは< >、コードは [] で示す。

(1) <円滑な演習補助>について

<円滑な演習補助>のカテゴリーは、SA が演習補助に入ることによって体験を伴う演習がスムーズかつ効果的に実施できていたことを示している。体験場所に配置された SA が「心理的な体験もさせてもらった」「こういうこともするとよいと導いてくれた」というように、各体験内容に応じた声掛けをしていたことを示している。また、SA が 2 年次生に対し、「質問にも丁寧に答えてくれた」「指示があつて動きやすかった」「道具の装着が丁寧だった」とあり、SA の補助により円滑に体験が進められていたことが示されている。

(2) <学修の動機付け>のカテゴリーは、SA の声掛けが体験学習の目的を意識させ、2 年次生が主体的に学ぶ姿勢で受講する動機づけとなっていたことを示している。[ヒントや質問してくれたので自分で気付けた][その場で質問形式で聞いてくれたので考えられた]というように、SA に気付きを提供され、受講生自ら学修する姿勢を示している。また、[考えながら体験できて楽しかった]と模擬的状況の設定の中で、知識や技能を獲得する学修の楽しみが表現されていた。

(3) <体験の意味付け>のカテゴリーは、体験項目 1 つ 1 つに対し SA が声をかけることにより、模擬的状況から何を考えるか明確にし、体験を意味付けて学んでいたことを示している。特に「どう思った? と質問されて考えるポイントがわかった」「〇〇できる? など体験でどこに注目すべきか声をかけてもらった」「もし〇〇だったら? 〇〇はどう? など気づきのヒントがあった」は多く表現され、体験した動作に対する高齢者への心身への影響の意味を体験者自身が考えられるよう声をかけていた。[動作を比べてみてとい

う声掛けで違いがよくわかった」[ひとつひとつの動作になぜ？と声かけがあった]と、体験の中でSAが提案をして意味付けをしている場面もあった。

(4) <体験の応用>のカテゴリーは、SAの説明があることで体験から想像を膨らませ、高齢者の生活状況を踏まえ学んでいたことを示している。SAからの「生活にどんな影響あるかの説明が具体的だった」「不自由な状況でのリスクの説明がわかりやすかった」「具体的な生活場面の説明でイメージが膨らんだ」「実際の辛さがイメージできる説明だった」とあるように、SAが意図的に高齢者の生活状況を伝えることで、2年次生は具体的に高齢者の不自由さやどのような危険に晒されているのかを想像し、考察することができていた。また、「先輩の実習経験からどうすれば良いのか教えてもらえた」「説明があったので母や祖母の状況を想像できた」のように、SAは自身が実習や実際の場面において知り得た知識を関連づけて説明していたことを示している。

(5) <先輩としての尊敬>は、2年次生が2学年上級生であるSAに対し、自身と比べて素直に尊敬の意を表現していることを示している。「色々な視点があって先輩らしさを感じた」「自分たちでは気づけない視点があった」といった知識に関する面だけでなく、「本当の看護師のような声かけだった」「笑顔で対応してもらえて有難かった」「声掛けの仕方がすごいと思った」といったコミュニケーションに関する面に対しても自分たちとの違いを実感していた。

表2 2年次生の「SA介入による影響」が及ぼす学習効果

カテゴリー	代表的なコード	コード数
円滑な演習補助	心理的な体験もさせてもらえた	4
	こういうこともするとよいと導いてくれた	4
	質問にも丁寧に答えてくれた	2
	指示があって動きやすかった	1
	道具の装着が丁寧だった	1
	1つ1つの動作に声をかけてくれた	1
学修の動機付け	ヒントや質問してくれたので自分で気付けた	5
	その場で質問形式で聞いてくれたので考えられた	5
	考えながら体験できて楽しかった	2
体験の意味付け	どう思った？と質問されて考えるポイントがわかった	6
	〇〇できる？など体験でどこに注目すべきか声をかけてもらえた	6
	もし〇〇だったら？〇〇はどう？など気づきのヒントがあった	6
	動作を比べてみてという声掛けで違いがよくわかった	3
	ひとつひとつの動作になぜ？と声かけがあった	2
体験の応用	生活にどんな影響あるかの説明が具体的だった	4
	不自由な状況でのリスクの説明がわかりやすかった	2
	具体的な生活場面の説明でイメージが膨らんだ	3
	実際の辛さがイメージできる説明だった	3
	先輩の実習経験からどうすれば良いのか教えてもらえた	2
	説明があったので母や祖母の状況を想像できた	1
先輩としての尊敬	色々な視点があって先輩らしさを感じた	3
	自分たちでは気づけない視点があった	2
	本当の看護師のような声かけだった	1
	笑顔で対応してもらえて有難かった	1
	声掛けの仕方がすごいと思った	1

表3 4年次生SAの「SA体験による学び」

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
関わり方の振り返り	関わり方の振り返り	・担当場所以外にも積極的にサポートできたらよかった
		・後半になるほど要領を得てきたので当初の学生には申し訳ない
		・教える経験がなく促ししかできなかった
		・前半での反省を生かして、後半伝え方を変えたりした
演習に対する気付き	演習効果に対する気付き	・声のかけかたで、答えやすい問い方は言わせているだけになるので言葉選びは重要
		・問いかけをすることで自由な考えを伸ばそうと心がけた
		・体験の場で問いかけると学生がすぐに振り返って考えることができる
	受講生に対する気付き	・SA側から声をかけることが大事だとわかった、学生からは声はかけられない
		・2年生は〇〇と思った、で止まっているようだったので、なぜか？どうしたらよい？とひとつひとつ考えてもらうことが重要
		・2年生は演習目的を理解しないまま参加していることがある
		・GWの進め方が十分わかっていなかった
		・素直に感想を言える学生と、表出できない学生がいる
今後に活かす学び	SA役割からの気付き	・先輩として学生目線の促しが必要
		・限られた時間でどう伝えるか考えた
		・先輩と後輩との交流が刺激になった
	知識の必要性	・サポートをしてみても知識を深めないと思った
		・国家試験も意識できた

3) SAの「SA体験による学び」

表3は高齢者疑似体験に参加したSAの【ワークシート1】「SA体験による学び」の結果である。17のコード、5サブカテゴリー、3カテゴリーに分類された。カテゴリーは< >、サブカテゴリーは《 》、コードは[]で示す。

(1) <関わり方の振り返り>カテゴリーは、SA体験を通して自身の行動や受講生への関わりについての振り返りを示している。《関わり方の振り返り》は[担当場所以外にも積極的にサポートできたらよかった][後半になるほど要領を得てきたので当初の学生には申し訳ない][教える経験がなく促ししかできなかった]など自身の行動や関わり方について振り返っていた。また、[前半での反省を生かして、後半伝え方を変えたりした]といった体験の中での成長をリフレクションすることができていた。

(2) <演習に対する気付き>カテゴリーは、SAという立場で講義に参加することで《演習効果に対する気付き》《受講生に対する気付き》があったことを示している。《演習効果に対する気付き》では、[声のかけかたで、答えやすい問い方は言わせているだけになるので言葉選びは重要][問いかけをすることで自由な考えを伸ばそうと心がけた][体験の場で問いかけるとすぐに振り返って考えることができる]といった高齢者疑似体験によって何を学ぶのかを意識し、その演習効果を最大限生み出すための気付きを示している。《受講生に対する気付き》では、[2年生は「〇〇と思った」で止まっているようだったので、なぜか？どうしたらよい？とひとつひとつ考えてもらうことが重要][2年生は演習目的を理解しないまま参加していることが多い][GWの進め方が十分わかっていなかった]と学生の受講態度への気付きが示されている。また、[素直に感想を言える学生と、表出できない学生がいる][SA側から声をかけることが大事だとわかった、学生からは声はかけられない]などSAとして2年次生にかかわることで気付く学生の特徴を示している。

(3) <今後に活かす学び>カテゴリーは、SA体験を今後の自身にフィードバックする機会として捉え、《SA役割からの気づき》《知識の必要性》があったことを示している。《SA役割からの気づき》では、こ

れまでの教員からの指導経験を振り返り、[先輩として学生目線の促しが必要][限られた時間でどう伝えるか考えた]と述べている。また、[先輩と後輩との交流が刺激になった]とあり SA 体験がこれまであまり経験していなかった他学年との交流のきっかけの場であったことが示されている。《知識の必要性》では、[サポートをしてみて知識を深めないと思った][国家試験も意識できた]と SA 体験が自身の現在の状況と照らし合わせ、成長につながることを見出していた。

5. 考察

1) 高齢者疑似体験の受講生視点による SA 活用の学習効果

今回、高齢者疑似体験において SA が受講生を支援することで、円滑に演習が実施され、効率的に授業運営がなされたと考えられる。高齢者疑似体験の講義を担当する教員は 2 名と少ない現実がある。SA の講義補助により、時間内に受講生全員に装具を装着し、複数の体験項目の実施が可能となった。高齢者疑似体験の SA 活用は、補助者として講義の効率性や安全面への配慮において必要不可欠といえる。

さらに、SA のきめ細やかな支援によって、体験項目それぞれに行う意味付けがなされた。その結果、受講生は高齢者理解の幅を広げ深めることにつながり、教育上の成果を上げたと考えられる。時任は¹¹⁾、SA は受講生から適切に支援する「タイミングの見極め」が求められていると述べている。また、体験学習にとって最も大切なのは“気づき”であると犬塚は¹²⁾述べているように、今回の高齢者疑似体験において、SA は 2 年生の気付きや学びを引き出す適切なタイミングで支援できていたといえる。

今回、SA は実習を終了している 4 年次生であった。原沢は⁹⁾高齢者の体験学習の課題として、より実践的に応用につながる看護理解を挙げ、実習における看護実践を通して理解を深める必要性を述べている。実習を経験した SA の関わりは高齢者への看護実践を通した視点が含まれ、高齢者の実情に即していたと考えられる。高岡ら¹³⁾は高齢者疑似体験によって得られた高齢者観について、対象がどのような知識を持ち、どのような経験をしてきたかが影響するとしている。今回の高齢者疑似体験は SA が知識を補い、現在の自分の生活体験と比較しながら高齢者の生活の不自由さを具体的に理解する経験となったといえる。SA が指導者として活躍していたと考えられる。

また、2 年生は先輩からサポートを受けることで、実習経験や学年進行に伴う成長を実感し素直に尊敬の気持ちを抱くことができた。SA が 2 年生のメンターおよびロールモデルになっていることがうかがえる。今回の高齢者疑似体験の SA 活用は、2 年生にとって近い将来の自分の姿を想像し学びの動機付けにつながったと考えられる。このように、SA の活用は、学修支援の質を向上させる重要な役割を果たしていると考えられる。

2) 高齢者疑似体験の SA 視点による学び

SA が自身の関わり方を振り返っていたのは、高齢者疑似体験の学習目的や SA としての役割を意識していたことが要因と考えられる。演習効果と受講者の立場への理解があり、よりよく学ぶためにはどうしたらいいのかを考えることができていた。自分の考えたことを相手にわかるように説明することの重要性を感じ、コミュニケーション能力を発揮したといえる。

文部科学省は、学生に対する教育・指導に学生自身を活用することは「教育活動の活発化や充実に資するだけでなく、教える側の学生が主体的に学ぶ姿勢や責任感を身につけることになる非常に意義深いものである」と提言している¹⁴⁾。今回の SA 活動を通して、参加した SA は既存の知識を再確認し、学ぶ必要性を深めていた。教える立場になることで、学びが深化し、モチベーション向上と自己の成長に寄与してい

老年看護学の高齢者疑似体験にスチューデントアシスタントを活用した学生の学び（吉川・水上・松原）といえる。これらは、SA 制度が SA 自身にとって学び、成長するという側面が見られたといえる立山の報告¹⁾と一致する。今回の高齢者疑似体験の SA 活用は、参加した 4 年次生の学びに寄与したといえる。

3) 高齢者疑似体験における SA 活用の効果と課題

今回の SA 活用による高齢者疑似体験は、学年を越えた縦のつながりや学びの交流の場となったが、その効果について体験者の自覚は不明である。SA 活用について、基礎看護技術の習得において岡谷ら¹⁵⁾は学生と他の学生たちが自由に交流し、質問や情報交換を行える環境づくりが必要であり、それが効果的な学修支援につながることを明らかにしている。SA 活用による効果や自己への気づきを得るためには、学生同士で学びを共有することや、具体的に感想や評価をする機会を提供することで、学びの広がりや深まりがさらに得られるのではないかと考えた。

6. おわりに

本研究では、今回行った高齢者疑似体験における SA 活用について受講者視点と SA 視点でその学びを検討し、今後の教育課題を述べた。受講生は、高齢者疑似体験において SA 介入の細やかな関わりにより、身体的特徴を理解し、高齢者の視点に立って思考することにつながっていた。高齢者の立場になるためには、心理的な理解は不可欠であり、生活者としてどのように感じているのかを想像しながら体験することが重要である。若年の視点を高齢者の視点に転換させるには、SA という同年代の感覚で想像を助けることが学びの効果が高いと考えられた。また、今回の高齢者疑似体験では先輩が身近なロールモデルとなり、受講生の学習意欲を向上させるしかけとなっていた。

SA は教える上級生にとっても、実習をととして学習したことを言語化して下級生に伝えることで、専門職者の資質である教育力を培うことができる一面もあった。SA 役割を体験した学生からは、受講生が自ら答えを探せるようなかかわりに難しさを感じつつも、SA 体験を自身の学びにつなげるきっかけとなっていた。また、学年を越えた縦のつながりや学び合う雰囲気が生まれると、共に成長し、主体的に学ぶ姿勢や責任感を身につけることにつながると考えられた。

謝辞

本研究にご協力くださいました本学看護学の学生の皆様に感謝致します。

引用文献・参考文献

- 1) 立山博邦 (2013). 大学におけるスチューデント・アシスタント (SA) 制度の考察—日米の比較の視点から—。社会システム研究, 26 号, 137-150.
- 2) 大学、短期大学、高等専門学校における学生支援の取組状況に関する調査 (2009). VII スチューデント・アシスト (SA)
- 3) 岩崎千晶 (2014). ラーニング・アシスタントの実践的思考に関する分析：初年次教育—スタディスキルゼミにおける学習支援を基に—。関西大学高等教育研究, 第 5 号, 29-38.
- 4) 大谷麻予, 中西勝彦, 松尾千晶 (2014). 初年次キャリア形成支援教育科目「自己発見と大学生活」：キャリア

科目担当学生ファシリテータ活動について. 高等教育フォーラム, 第4号, 71-80.

5) 千葉美保子 (2021). 初年次教育における学生アシスタントの支援効果と課題に関する一考察—甲南大学共通教育科目の受講生アンケート調査結果から—. 甲南大学教育学習支援センター紀要, 第6号.

6) 新井大裕 (2016). 「学生の社会性向上」の観点から見るSAにいる「教員補助」の意義と可能性—國學院大學におけるスチューデントアシスタント制度の取組から—. 国学院大学教育開発推進機構紀要, 第8号, 1-31.

7) 高瀬加容子 (2017). 看護系授業におけるPBLチュートリアル教育についての考察—スチューデントアシスタントを活用して—. 東海学園大学教育研究紀要, 第2巻, 第1号, 77-87.

8) 竹田恵子, 兼光洋子, 太湯好子 (2001). 高齢者疑似体験による高齢者理解の可能性と限界—実施時期による学習効果の違い—. 川崎医療福祉学会誌, 第11巻, 第1号, 65-73.

9) 原沢優子, 松岡広子, 星野純子, 宮下美香, 濱畑章子 (2004). 老年看護学における高齢者理解に向けた体験学習の効果と課題. 愛知県立看護大学紀要, 10巻, 41-48.

10) 清水初子, 水戸美津子, 流石ゆり子 (2000). 老年看護学における教育方法としての体験学習. 山梨県立看護大学紀要, 2巻, 1号, 73-85.

11) 時任隼平 (2016). アクティブラーニング型授業において受講生がスチューデントアシスタントに求める能力に関する研究. 関西学院大学高等教育推進センター日本教育工学会論文誌. 40巻, 169-172.

12) 犬塚久美子 (2000): 第4章 シミュレーション, 藤岡完治, 野村明美 (編): わかる授業をつくる看護技術教育技法3シミュレーション・体験学習, 133-144, 医学書院, 東京

13) 高岡哲子, 留畑寿美江, 服部ユカリ (2005). 看護学生の「高齢者疑似体験」後の高齢者観と教育プログラムの検討. 旭川医科大学研究フォーラム, 6巻, 1号, 33-42.

14) 文部科学省 (2000). 大学における学生生活の充実方策について (報告)—学生の立場に立った大学づくりを目指して—

15) 関谷まり, 笠松由利, 野波侑里 (2025). 基礎看護技術の技術習得における学生アシスタント活用の効果と学修サポートセンター利用率向上への一考察. 大手前大学国際看護研究所研究集録, 第9号, 32-38.